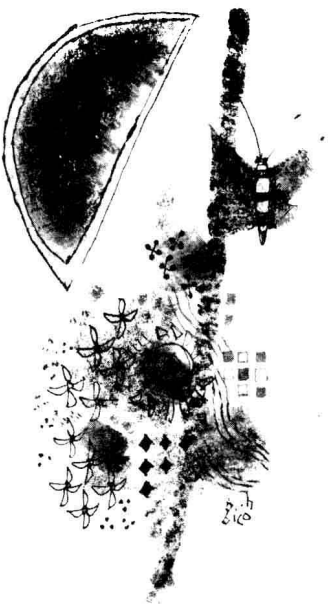
鏡の中の真珠

源氏鶏太

覡の中の真珠



源氏鶏太

鏡の中の真珠

一九七九年 七月二五日 第一刷発行
一九七九年一一月三〇日 第三刷発行

定 価 九八〇円

著 者 源氏鶏太

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社
東京都千代田区一ッ橋二―五―一〇
郵便番号 一〇一
電話 出版部 二三〇―六三六一
販売部 二三八―二七八一

印刷所 中央精版印刷株式会社
株式会社美松堂印刷所

検印廃止
乱丁・落丁本はお取替えいたします。

© 1979 K. GENJI, Printed in Japan

0093-772207-3041

目次

第一章　昔の風　5
第二章　今の風　58
第三章　風と波と　116
第四章　華やいだ風　160
第五章　あらしの前　225
第六章　頭上の風　290
第七章　風の行方　351

装画　早川義孝

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

鏡の中の真珠

第一章　昔の風

「この齢で家にずうっといると邪魔にされるんでね。」
矢代宗介がいって、更に、
「しかし、会社へ行くと、もっと邪魔にされるんだよ。」
と、相手によってはつけ加えたりする。
「まさか。」
「いや、本当の話だ。君だってこの齢になるといずれわかるだろう。」
「そういうもんですかね。」
「ああ、そういうもんだ、この人生って。しかし、わからないですます方法だってある。」
「おしえて下さい、その方法を。」
「実に簡単なんだ。早く死んでしまうことだ。」
「それは困ります。」
「それだったらせいぜい長生きをして、わたしが日日に味わっている老いの悲哀を嚙みしめて暮すことだ。勿論、この世の中には例外ということがあるし、わたしなんかこれでいくらかマシの部類に属しているだろうが。」
「私は、矢代さんは、最も恵まれたお年寄りだと思って来たんですが。」
「一応、かも知れぬ。」
宗介があっさりと認めたのは、今のところ当分の間、食べてゆくに困らぬ筈だと相手がいっているとわかったからで、
「しかし、それであって家でも会社でも邪魔にされて過すなんて、実に辛いことなんだ。すでに余計な人間として眺められている。早く消えてくれと思われている。」
宗介は、口でいうほどには悲愴がかっているようではなかった。たとい周囲が、どのように思おうが、心の中では、（どっこい、そうは問屋が卸すものか）
と、思っているからのようであった。
まだまだこの人生には自分のような年寄りを必要とすることがある筈だ、とも。尤もそうでも思っていなかったら七十歳になる今日まで元気でいられなかったろう。すでに五年前に妻を亡くしている宗介にとって、差しずめの生甲斐は、孫娘の麻子の花嫁姿を見ることであったろう。それも通りいっぺんの花嫁姿では困る。宗介も気に入り、麻子も好きになった男と結婚して貰いたかった。そのために宗介は、どんな苦労もいとわぬつもりでいたし、麻子にもかねてからそういってあった。しかし、麻子は、それをどの程度まで本気にして聞いていたか、今のところは一向に反応がなかった。恋人らしい男がいるかどうかすら宗介は、聞かされていなかった。聞いても笑っているだけであった。そういうことも宗介を孤独の思いに追いやっているひとつ

の原因になっているのかも知れなかった。
宗介は、かつてはN化学工業の専務にまで昇進していた男であった。しかし、とうとう念願の社長になれなかった。社長は、五年も後輩の湯原道夫が抜擢され、この人事は、社内の若返りとして好評であった。宗介は、すでに六十歳になっていたし、自分を一流会社の社長の器でないと知っていたこともあって、素直に退陣する気でいた。
しかし、湯原は、先輩である宗介のために気を遣ってくれて、子会社のN薬品の社長の地位を用意してくれた。いろいろと不満もあろうが我慢して貰えないかといった。勿論、宗介に不満がなかった訳ではないが、しかし、六十歳で隠居は早過ぎるし、かといって他にもっといい就職先のあてもなかったので、喜んでその好意を受けることにした。
N薬品は、資本金十億円の会社で、有楽町にあった。N薬品の社長としての宗介は、よくやった方であろう。業績も大いにあげて、湯原からも感謝された。また、社内の評判も悪くなかった筈である。宗介は、今でもそう思っていた。
宗介は、六十五歳になったとき、社長から会長になった。更に昨年、相談役になった。すべては今もN化学工業の社長として第一線で活躍している湯原の特別の配慮によるものであった。
「これからは老後を気楽に過して下さい。そして、会社へは気が向いたときにだけ出て下されば結構です。勿論、そのときのために部屋は用意しておきます。」
これが湯原のいい分であった。以前のような訳にはいかないがちゃんと報酬が貰えるのだからこんなに有りがたいことはなかった。しかも、直接の責任はない。宗介は、大いに感謝した。
以来、宗介は、自分勝手に火曜日と金曜日に出勤することにした。運動になるからと会社の自動車をまわして貰うことを遠慮した。世田谷の自宅からバスで渋谷に出、それから地下鉄で銀座へ出るのは、ラッシュアワーを避けている分には、年寄りのいい運動になった。帰りは気が向けば、会社の誰かを誘ったりして銀座辺で食事をしたりする。たしかに悪くなかった。
初めの三カ月ぐらいは、伊東社長その他の重役たちが宗介の来ていることを知って、
「やァ、どうもご苦労さまです。」
と、挨拶に顔を出し、何分か雑談するようになっていた。
そういうとき宗介の方でも会社の近況を聞いたりしていた。相談役であるからそれくらいのことは当然だと思っていた。しかし、そのうちに宗介は、せっかく出勤していても誰も顔を出さない日が多くなったことに気がついた。終日放っておかれた。初めのうちはたいして気にとめなかったが次第に気になるようになって来た。会社は多忙である。刻刻に大きく動いている。しかし、宗介のいる相談役室には何んの影響もなかった。無風地帯であるといってよかっ

た。
（ひょっとしたら）
ある日、宗介は、ふっと思った。
（会社ではもうわたしなんかに出て来て貰いたくないのかも）
宗介は、ショックを受けた。ためしに三週間ばかり出勤しなかったが会社からは何んの音沙汰もなかった。忘れられているようであった。
宗介は、腹を立てた。いっそ、相談役を辞任しようかと思った。今のままでは一種の報酬泥棒である。宗介の気性としては、そう思われることが厭であった。
宗介は、ある日、N化学工業の湯原社長を訪ねてそのことをいった。湯原社長は、黙って聞いていてから、
「今のままでいいんじゃァありませんか。」
と、笑顔でいった。
「どうしてですか。」
「要するに長生きするためですよ。」
「長生き……。」
「老人が家の中にこもったきりというのはいちばんいけません。そのためにも週に二回程度の出勤は必要ですよ。」
「すると湯原さんは、わたしの健康のために相談役にして下さったんですか。」
「それもありますが、それだけではありません。」
「と、おっしゃいますと。」
「そのうちにN薬品でもう一度矢代さんを必要とするときがくるかも知れません。」
「今更、こんな年寄りにそういうことがあるでしょうか。」
「勿論、わたしは、そういうことのないように祈っているのですが、ないという保証はどこにもありません。N薬品にはその要素があります。ですから、矢代さん。」
湯原社長は、もう一度、こんどは謎めいた笑顔を見せて、
「どうか、今のところはお気楽に。」
つられて宗介も笑顔になって、
「わかりました。当分はせいぜい気楽にさせて頂きましょう。」
と、いっておいた。
その後、伊東社長以下が多少態度を変えたのは、湯原社長から何かいわれたせいかも知れなかったが、日が過ぎると、結局、以前と似たようなことになってしまった。かつては社長時代の宗介に何度も怒鳴りつけられたことのある伊東社長にとって、いぜんとして宗介は、煙たい存在であるのかも知れなかった。とすれば宗介としては、
（気のちいさい男だ）
と、いいたくなるのだが、案外湯原社長は、伊東のそういうところを見透おしていて、まさかの場合にそなえて宗介を相談役に残しているのかも知れなかった。
しかし、宗介は、邪魔にされていると思うと、会社へ出かけることが、何んとなく億劫になるのはいたしかたない

ことであった。つい休みたくなるし、休んだところで会社からは催促がくる訳でなかった。しかし、かわりに嫁の信子が、

「おじいさん、今日は、会社へお出かけになる日でしょう。」

と、部屋の外から催促する。

必ずしも悪意がこもっているとは思いたくないが、せめて火曜日と金曜日ぐらいには出かけて貰わないと困るといいたげであった。目ざわりになるといいたげであった。こちらにもいろいろと予定があるといいたげであった。明らかにそういう眼になっていた。

そうなると宗介は、

「わかっている、今、出かけようと思っていたところだ。」

と、気がすすまなくても立ち上らざるを得なくなる。

矢代家は、宗介と息子の宗太郎夫婦、それに孫の麻子と宗吉の五人家族であった。宗太郎は、T機械の課長をしていた。麻子は、今年の春からS工業に勤めているが、宗吉は、まだ学生であった。世間的には一応恵まれた家族といっていいだろう。しかし、宗太郎の妹の達子は、亭主にだらしがないところがあって生活が苦しく、泣きつかれると宗介は、つい何がしかの援助をあたえていた。もともと宗介の反対を強引に押し切っての結婚であったし、今でもその亭主の顔を見たくないくらいに思っていた。

宗介は、当然のことながら矢代家では自分がいちばん偉いのだと思っていたし、また、そうあるべきだと信じていた。勿論、そのことを面と向って否定する者は一人もいなかった。にもかかわらず矢代家における宗介の地位が、五年前に妻を亡くしてから何んとなく土台がぐらついて来ていることを宗介は、その肌で感じるようになっていた。代って、嫁の信子の姿が目立つようになっていた。その傾向は、宗介が会長から相談役になって、毎日出勤する必要がなくなって、いちだんと強くなっていた。今のところ信子は、殊更に宗介をないがしろにする訳では決してなかった。また、そんなことを宗介は、許したりはしなかった。しかし、妻を亡くした宗介は、片翼を失った哀れな鳥に似ているところがあった。自分ではそう思わなくとも、周囲がそのように眺めているに違いなかった。この家の中で、

（いちばん早く死んでいく人間）

と、思われている。

理屈としてはまさにその通りであろうが、宗介にとっておよそ面白くない気分であった。こうなったら意地にでも長生きしてやる。かといって、自分の家族の中から自分より先に死ぬ人間の出ることは絶対に困るし、厭であった。やっぱり自分がいちばん先に死ぬべき人間であるとわかっていた。ただ、その時期が問題であった。

宗介は、亡くなった妻に対して、必ずしもいい亭主でなかったろう。浮気がバレて、夫婦別れの直前まですすんだこともあった。うるさいし、気が利かぬし、その上強情で、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

早く死んでしまえと密かに思ったこともあった。しかし、その妻が風邪をこじらせてあっけなく亡くなったとき、宗介は、自分にとっていかに大切な妻であったかを思い知らされた。同時に、妻の重味を、といってもよかったろう。宗介は、その重味を失ったことで浮き上ってしまった。

洗濯一つにしても遠慮がちに信子に頼まなければならなかった。宗太郎は、遠慮をすることはないですよ、といってくれるのだが。

宗介は、信子に催促されて、午前十時過ぎに世田谷の家を出た。バスで渋谷に向った。秋が終りに近づいて、やがて老人にとっていちばん辛い冬がやってくる。

今年の冬、宗介は、二人の知人を失った。うちの一人は、老人性肺炎とかで、入院して三日目に亡くなった。たとい三日間でも妻に看病されながらの死であるからまあよしとすべきであったかも知れない。その点、宗介にはその妻がいないのだから考えると心細くなってくる。もし、それが癌ででもあったらと思うと、ぞうっとしてくる。

しかし、もう一人の知人の死は、まことに悲惨であった。かつてちゃんとした会社の部長まで勤めた男で、その後、第二、第三の就職をした。勿論、そのつど会社の格も下り、地位もおちた。しかし、六十七歳を過ぎると、どこも雇ってくれなかった。ある意味でちゃんとした会社の部長まで勤めたという経歴が邪魔をしたのかも知れなかった。しかし、七十歳になったとき、どうしてももう一度働きに出る必要に迫られた。たよりにしていた一人息子が事業に失敗し、多額の借金を残して自殺してしまった。妻は、二年前に亡くなっていた。嫁と二人の孫が残された。嫁は、舅の面倒を見ていく能力がないといい出した。無理もない話であった。しかし、知人にも嫁と孫を見ていく能力がすでになくなっていた。持家は、とうに借金の一部として取り上げられていた。なお借金を催促されていた。僅かな年金だけでは生活が無理とわかっていた。

知人は、何んとか隅田の町工場に夜警として住み込むことが出来た。七十歳という年齢から考えると、まだ一抹の運が残っていたのかも知れない。

宗介がその知人に遇ったのは、昨年の暮、全くの偶然であった。およそ十年振りで、かつての部長時代の羽振りのよかった頃にくらべると、人違いかと思われた。声をかけられなかったら宗介の方で気がつかなかったろう。一口にいえば、それほど零落していた。宗介は、近くの喫茶店に誘った。

「あんたは、本当に仕合わせな人だ。」

知人がいった。更に、

「私の場合は、長生きしすぎたんだ。あの極道息子が自殺したとき、私たちも自殺してしまえばよかったんだ。」

そういって人眼もはばからず男泣きした。多少芝居がかっていると思わぬでもなかったが、口に出していえること

でなかった。宗介は、別れ際に知人のポケットになにがしかの金を紙に包んで押し込んだ。知人は、すでに昔のプライドを捨てていた。ついで知人は、宗介の名刺を貰いたいといって、

「こうなったら一日も早く死にたいよ。」

その別れ際の自嘲的とも思える言葉の通りに、今年の冬の寒い夜中に一人で死んでいった。そのあまりにも寒寒とした葬式の光景が今も宗介の頭の中に刻み込まれていた。

さっきから宗介の横顔を気がかりそうに見ている四十四、五歳の女があった。

宗介は、渋谷でバスを降りた。終点だから十数人の客もすべて降りた。宗介は、ここから地下鉄で銀座へ出るつもりであった。有楽町の会社までは歩いて十分ぐらいだからちょうどいい年寄りの運動になる。尤も時には会社の自動車で送り迎えをして貰っていた頃の気楽さを思い出さぬでなかったが、しかし、さっきまでのような知人の不幸を思い出したりした後では、身の程を思い知ることだと厳重に自分をいましめることになる。

バスの中で自分を気がかりそうに見ていた女のことは、宗介は、すこしも気がついていなかった。近頃では、昔と違って、女には眼が向かず、とかく年寄りが眼につくようになっていた。そして、何んと年寄りが多いことか、と思うようになっていた。昔もそうであったのかも知れないが、この頃になって特にそう思われるのは、やはり宗介の老いのせいかも知れなかった。同時に、醜い年寄りが多くなっているような気がしていた。しかし、宗介にしたところで人眼には例外でなかったかも知れなかったろう。

さっきの女は、宗介の後をつけていた。声をかけかけてはためらっているらしかった。どうやら人違いであることを気にしているのかも知れなかった。そのうちに思い切ったように宗介の前にまわり、顔を覗き込むようにした。宗介は、いぶかるように女を見た。見知らぬ女であった。しかし、あるいは遠い昔にどっかで見たことがあったかも、と思いかけたとき、

「矢代さん。ね、矢代宗介さんでしょう。」

と、女がいった。

「そう。わたしは、矢代だが。」

宗介は、女の正体がわからぬままに答えた。とたんに、

「ああ、やっぱり、でしたのね。」

女は、華やかな笑顔になった。そこらがパッと明るくなるようなふくよかな笑顔であった。そのため四十四、五歳と見えていた女が急に四十歳前後に若返った。特別の美人でなかった。しかし、色白で、眼鼻立ちがはっきりしていた。

「やっぱり……。」

何がそうなのかわからぬままに宗介は、その笑顔に誘われるように笑顔になっていた。すると、さっきから知人の悲惨な死のことで暗く沈んでいた宗介の気持までが明るく

なって来た。これは有りがたいことであった。
「そうよ、やっぱり。さっきのバスの中からどうも矢代さんのような気がして、それとなくウインクを送っていたんですけど。」
「気がつかなかった。」
「すると、今もまだあたしが誰で、矢代さんにとってどういう女であったかもおわかりになってませんのね。」
「残念ながら。」
「薄情なお方。」
「そんないい方は困る。」
「それともあたしって、そんなにお婆さんになってしまったのか知らね。」
　しかし、女のいい方には屈託したところがなかった。自信というような厭らしさでなしに、天性のものかも知れなかった。
「そういういい方はもっと困る。」
「ごめんなさい。」
「別にあやまることはない。」
「そうですわね、昔のことを思えば。」
「昔のこと……。」
「もう二十年近くになりましてよ、あれから。」
「二十年も。」
　宗介は、女の顔を見直した。さっき、あるいは遠い昔にどっかで見たことがあったかも、と思ったことを思い出した。
　その二十年前なら宗介は、五十歳であった。仕事の方では勿論だが、女にかけても現役であった。女のことで妻と別れ話になりかけたのもその頃のことであった。思えば、華やかな時代であった。悔いがなかった。しかし、今となってはあまりにも遠い過去のことになっていた。
　宗介の頭の中にいくつかの女の顔がよぎった。しかし、はっきりと思い出せる顔はすくなかった。その輪郭がぼやけていて、名前も忘れかけている。そのうちに一つだけ、まるで茫漠の遙か彼方からぽっかりと浮かび上ってくる顔があった。その顔が眼の前の女の顔に重なった。同時に、その名前も宗介の口からすらっと出た。
「夏子。」
「そうよ、あたしは、夏子。やっと思い出して下さいましたのね。嬉しいわ、あたし。」
　夏子は、ほっとしたようにいって、
「その節は、いろいろと有りがとうございました。あらためてお礼を申し上げさせて頂きます。」
　と、折目正しくいった。
「いやいや、お礼だなんてとんでもない。」
　宗介の方が却ってあわてていた。
　せっかく二十年振りで昔の女に会ったのに立話でもなかろう。まして宗介は、会社へ行っても邪魔にされに行くようなものである。

今日は、初めから気がすすまなかった。それを信子に追い出された。しかし、そのお陰で昔の女にこのようにして会えたのだから信子に感謝しておいていいかも知れない。もし今日のチャンスを逃がしていたら宗介の先の短い生涯にこういうことがもう一度あるとは思われなかった。尤も、そのときの宗介は、今後夏子とどうなろうこうなろうと考えていた訳でなかった。自分の年齢を考えれば当然のことだし、夏子にしたところでどういう生活をしているかわかっていなかった。ただいえることは、その服装からしても割合いに裕福に暮しているらしいことであった。昔の女の零落を見るのは辛いことだし、逆にこっちが零落していたらもっと辛かったろう。恐らく早早に逃げ出していたかも知れない。

「どうだね、もし迷惑でなかったらそこらでお茶でも。」

「あたしは喜んで。でも、矢代さんは、かまいませんの。どこかにお出かけの途中でしょう。」

「それが一向にかまわんのだ。」

二人は、近くの小綺麗な喫茶店に入った。近頃の宗介は、散歩のついでに喫茶店に入ることがあるが、しかし若い女といっしょというのは、絶えて久しいことであった。そのため若干のてれをおぼえていた。尤も夏子は、四十五歳の筈だし、決して若くはない。しかし、七十歳の宗介にとっては、やはり若い女というべきであった。まして宗介の眼に夏子は、活き活きとした女に見えていた。年齢と関係なしに、精神的にまだまだ若さを失っていない、ということであったろうか。そのことが宗介にまぶしかったし、こうやって向い合っていると、自分までがその若さに触れているような気がして来た。そのことが有りがたかった。

周囲の客の大方は、若いアベックであった。でなかったら仕事のことで打ち合わせをしているサラリーマン風の男たちである。仕事が面白くて、それを一つの生甲斐としていることが感じられて、かつて宗介にもそういう時代があったと微笑ましかった。いい換えると、今の宗介は、場違いのところに来ていることにもなる。

しかし、夏子は、そういうことには一向におかまいなしに、

「お砂糖は、一つでいいですのね。」

と、昔のことをおぼえていていった。

「そう。」

夏子は、コーヒーを一口飲んで、

「お若いわ。」

と、あらためて宗介を見直すようにしていった。

「冷やかしは困る。」

「冷やかしではありません。だって、本当は七十歳におなりになった筈でしょう。だけど、六十歳でも通りましてよ。お顔の色がとってもおよろしいし、お歩きになるときでも背筋がちゃんと伸びていました。ですからあたし、ひょっとしたらお人違いをしたのかもと思ったんですよ。」

「では、わたしもいわして貰おうか、お礼に。」
「いって頂戴。」
「君だって、せいぜい四十歳にしか見えぬ。昔のよしみでざっくばらんにいうが、いい女になった。まさに中年の花盛りといいたいところだな。」
「本当に、そう思って下さいますの。」
「勿論、今更嘘をいっても仕方がなかろう。」
宗介は、笑っていった。しかし、自分では必ずしもお世辞をいったつもりはなかった。一つには、近頃、自分が最も引目に感じていた老いについてうまくいってくれた嬉しさのせいもあったろう。
「すると。」
夏子は、すこし顔を寄せて来ていった。その眼が宗介に笑いかけていた。ぞくっとするような女の色気をふくんでいた。宗介は、つい二十年前の夏子との閨房でのことを思い出したくらいであった。微かにその胸が騒いで来ていた。
その二十年前に宗介が盛んに女遊びをしていたことはすでに書いた。夏子は、そのうちの一人に過ぎないのだが、しかし、こうやって眼の前にしていると、他の女たちのことがすべてぼやけてしまって、夏子とのその頃のことだけが奇妙なくらいに鮮明に思い出されてくるようであった。
かといって、特別なことがあった訳ではなかった。情事としてはありふれていた。夏子は、OL上りのホステスで、その頃、宗介がよく行っていた銀座のバーに勤めていた。そのバーは、夏子にとって二度目だといっていたが、まだ初初しさを失っていなかった。夏子が入店の日に宗介の席に着いたことは、後日になって考えれば、何かの因縁であったかも知れなかった。酔うていた宗介は、夏子の肩をいきなり強く抱いた。夏子は、じいっと我慢していた。変に抵抗したりしないところがよかった。
次から夏子は、いつも宗介の席に着くようになった。恐らくマダムの指示もあったのであろう。宗介は、そのバーでは大切な客の一人として扱われていた。宗介は、夏子がいることを愉しみにそのバーへ積極的に行くようになった。夏子に好かれている、と思うようになっていた。まるまるのうぬ惚れでもなかったろう。
半年ぐらい過ぎて、宗介は、夏子を送ってやった。ためしに誘ってみると、黙っていたが頭を横にふらなかった。ホテルでの情事は、宗介を満足させた。勿論、宗介が夏子にとって初めての男ではなかった。しかし、まだ未熟なところがあって、宗介は、そういう夏子を一人前の女に仕込んでゆく喜びをおぼえた。事実、その後の夏子は、宗介に仕込まれて、確実に成熟していった。そのことを夏子は、顔をあからめて口にしたりした。一生はなれたくないという意味のことをいったりもした。宗介の自尊心は、適当にくすぐられた。
半年目に宗介は、夏子の母親が癌で入院していることを知った。夏子としては何気なくいったつもりだろうが、宗

介は、放っておかれなくなった。過去、そのつど何がしかの金を渡していた。夏子は、それ以上に何かをねだったりするようなことはなかった。宗介にとって、欲のない女であった。そこらが過去の別の女たちと違っていたかも知れない。

宗介は、入院費の一部にと二十万円を夏子に渡した。当時の二十万円は、宗介にとってもやはり大金であった。しかし、それ程に惜しいと思わなかったのは惚れていたからであろう。夏子は、思いがけぬ顔をした。ついで涙ぐんだのは、ぜひ必要な金であったからに違いなかった。以来、夏子は、いっそう宗介につくすようになった。しかし、夏子の母親は、間もなく死んだ。そして、夏子は、田舎へ帰って結婚した。宗介は、別に十万円を餞別として渡した。

「ご恩は、一生忘れません。」

それが別れの夜のホテルでの夏子の最後の言葉であったことを、宗介は、今思い出していた。

宗介は、その後、夏子の消息を聞かなかった。田舎で仕合わせな結婚生活を送っているだろうと思っていた。いや、そのことすら忘れていた。思い出すことすら忘れていたといっていいかも知れない。

しかし、その女が、忽然とでもいいたいかたちで宗介の前に姿を現した。当時から多少予想されたことであるが、その予想を遙かに超えた成熟した四十女になっていた。しかも、ぞくっとするような色気をふくんだ眼で、宗介に笑いかけていた。

「するとって。」

宗介は、聞き返した。その胸の騒ぎはおさまっていなかった。

「こんなこと、いっていいか知ら。だって、二十年振りでお会いしたばかりなのに。」

「どんなことか知らんが、別にかまわんだろう。」

「あたしたち。」

そこで夏子は、ふっと軽く笑って、

「まだまだお似合いということにならないか知ら。」

「お似合い。」

「もう一度、昔のようになることです。」

「冗談をいって貰っては困る。」

宗介は、思わず吐き出すようにいった。しかし、別に腹を立てているのではなかった。正直なところ、宗介は、密かに夏子のそういう言葉を期待していた。だから満更でなかった。嬉しかった。しかし、七十歳という年齢を考えると、うかうかとそんな夏子の言葉に乗っていったらどんな恥をかくかわかったものでなかった。

「あら、あたし、本気ですのよ。」

「本気ならもっと困る。」

「どうしてですの。あたしみたいなお婆さんではやっぱりダメってことですの。もっと若くないといけませんの。」

「君は、いい女だよ。そのことはさっきもいった。惚れ惚

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com